論文の要旨

柳 田 忠 則

本論文の研究の目的は、伊勢物語と同じジャンルに属しながら、その蔭に隠れ、研究が立ち遅れている大和物語について、伝本、創作性、構成、注釈における未開拓な分野を考究し今後の研究に資することにある。以下、その内容の要旨を述べる。

第一章は大和物語の伝本についての研究である。第一節では大和物語の流布本、異本、古筆切について、今日までの研究状況を俯瞰しつつ問題点を指摘し、今後の研究の指針を示した。これ以降は各伝本の考察である。第二節では流布本を代表する伝為氏筆本について同系統で新出の大永本、玄陽文庫本を介入させることで伝為氏筆本の本文の性格をより明確にした。一方、第三節では異本を代表する鈴鹿本の本文について同系統の御巫本と比較し、その性格を探った。その結果、鈴鹿本は御巫本よりも後の成立になり、大和物語の原型云々よりも享受面から重視すべき伝本であることを述べた。第四、五節は新資料についての紹介と考察である。前者では日本大学図書館が所蔵する寛喜本系統の一伝本、奈良絵本を付したる一伝本、大和物語抄の引く定家本をそれぞれ対象にし、各伝本の性格について言及した。最初の寛喜本とは藤原定家が寛喜三年八月十八日に書写したもので、それを文明十年九月六日に藤原親長が書写したのが親長本である。日大本はこの親長本を一睡と号した北条氏直が延徳二年の夏に外題とともに書写したものである。日大本は現存するこの系統本の中で書写年次が最も古く、文明十年時における親長本の純粋な本文を今日に伝えていると考えられる。次の奈良絵本を付した伝本の本文は混態本文であるが、近世初期における本文の享受と大和物語の奈良絵本の生成を考える上で貴重な伝本と言えよう。最後の大和物語抄の引く定家本についてはこれまでその存在が不明であったが、日大本はこの系統の伝本であることが判明した。日大本は大和物語抄の成立を考える上で貴重な伝本と言える。後者では三条実起筆大和物語を対象にした。この本は天明十二年七月の書写でそれほど古いものではないが、装丁をみると漆塗りの二重の箱に収められ、内箱の金具の細工には葵の紋の彫金を施しており伝来を知る上で興味深い。その本文は混態本文であるが、これらの中には九州大学蔵細川家旧蔵本や新出の大永本との接触がみられることから近世における伊勢物語本文の享受を探る上で貴重な伝本と言えよう。第六、七節はともに附載説話第二類に関する論文である。附載説話第二類とは御巫本と鈴鹿本の一七二段と一七三段との間にみられる九章段を言

う。これら九章段は平中物語一九段から二七段まで段序が一致している。第六節ではここに挿入したのは一七二段の宇多帝のことが附載説話第二類の創始者の念頭にあり、それをもとに各章段を連想の如く「菊」に関連づけ、さらに平城帝と親しい関係にあった宗于を主人公に仕立てたと考えられる。第七節では附載説話第二類の本文について考察した。平中物語の本文と比較し、主人公を宗于とすることで虚構化を目指し、ここでは本文の洗練、理解を助ける工夫、迫真の描写と言った現象をみることができた。

第二章は大和物語の創作性についての研究で十節から成る。第一節では在原業平関係の章段を対象にした。業平は大和物語一六〇段から一六六段まで連続して登場する。これらの章段は大和物語の作者によって伊勢物語に潤色を加え虚構化を目指したものと考えられる。虚構化は以下の論文でも認めることができる。第二節では無名章段の一四一、一四二、一五四段を対象にした。前後の章段等と比較し、これらの章段は歌語りそのものでなく虚構であることを論じた。第三節では第一節でふれた業平関係の一六六段を取り上げ、新たな視点から考察した。一六六段は古今集、伊勢物語をもとに成立し、新たな面を創出させたものであった。第四節では立田山伝説として名高い一四九段を取り上げ、これと共通する古今集、伊勢物語と比較し、その生成を探った。その結果、一四九段は古今集、伊勢物語をもとに肉付けし、そこから創作意識を窺うことができた。第五節では第二節でふれた一四一、一四二段を取り上げ、二つの章段にみられる女主人公の対照性について言及した。即ち一四一段の筑紫女は外なる人で外に目を向け行動的な女性であり、一方、一四二段の故御息所の御姉は内なる人で慎み深く、控え目な女性であった。この対照性は作者が歌語りから一歩進んで創作の一端を示したものと言える。

第六節から第九節までは大和物語の創作方法について考察したものである。このうち第六節では唯一、前半の第三段を対象にした。ここは延長四年（九二六）に催された宇多上皇六十賀をもとにしての創作と考えられる。作者は様々な方法を駆使し虚構化を目指していた。それに至った要因はここに登場する作者のとしこへの関心の高さにあった。事実、彼女は大和物語の中に一番多く登場している。第七節では一五〇段から一五三段までのならの帝の章段についての考察である。ならの帝については一五三段を除き、一五〇～一五二段に人磨が登場することでこれまで様々な帝があてられてきた。考察の結果、これらの章段には平城帝が大和物語作者の根底にあ

り、そこから発展させ創作に及んだものと考えられる。第八節では女流歌人伊勢に関する章段を対象にした。彼女は初段をはじめ三〇、一一九、一三八、一四一、一四七の六章段に関係している。これらの章段をみると、例えば初段では伊勢集にみられる和歌を削除し、それにともない地文を改めたり、一三八段では彼女の和歌を利用し架空の人物に仕立てたりして脚色を加えていた。こうした要因は作者の伊勢への関心の高さにあった。第九節では在中将関係章段について考察した。これについては第一、三節でもふれたが、これらの論文を発表後、先学の有益な研究がみられ、啓発されることが少なくなかった。そこで、改めて新たな視点から考察を試みた。結論として作者は伊勢物語をもとに構成を考え、それとは別な世界を目指し創作したと言うことができる。

最後の第十節では大和物語と後撰集の関わりについて考察した。両者を比較し、和歌の有無に関した章段、和歌の配置の異なる章段、和歌の異同がみられる章段、後撰集だけでなく拾遺集とも共通する章段、和歌の詠まれた時点の異なる章段を取り上げた。その結果、大和物語には作為性がみられ、それは後撰集があってこそ可能であり、両者の直接の関わりを指摘した。

第三章は大和物語の構成についての研究である。まず第一節では大和物語四七段から五三段までの章段が連続する場合と、八九段単独の場合とにみられる構成意識を探った。前者では人物配置や時間的な展開を考慮し、かつ内容的にみると対照的にしていた。また、後者では一首の和歌を中心に左右の各内容は時間を追って叙述され、かつ登場人物の心情からみてここでも対照的にしていた。これら二つの例から歌語りから発展しひとつの文学的発想を認めることができよう。次に第二節では大和物語の前半と後半をどこで分けたらよいのかを構成面から考えた。これには諸説あるが、第四節での考察を踏まえて一四一段以降を妥当とみた。さらに第三節では宗于関係の章段が構成にどう関わっているかを考えた。宗于関係の章段は、宗于が連続する場合、宗于単独の場合、宗于の息子や娘の場合という場面に分けられるが、これらに共通するのはいずれの場合も構成を考えて宗于関係の章段は配置されているということである。ここから大和物語作者の宗于への関心の高さが窺われる。最後の第四節では大和物語一四一段以降を後半とみてその構成について考えた。ここでは都の話と地方の話を交互に配置し、かつ各グループ内は内容や人物面での配慮を窺えた。

第四章は大和物語の注釈についての研究である。第一、二節では和歌と地文をそれ

ぞれ対象にした。前者では大和物語三十段にある「沖つ風」の歌について従来ややもすると見過ごされてきた言外の意味を含めることで詠作者の心情に迫った。後者では一四一段の「心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに」という地文について考えた。この本文の動作主が誰であるかや「あはれ」の語は、この章段の構想と密接な関係があり、それだけ作者はこの一文に神経を使っていたわけである。第三、四節では二つの注釈書を対象にした。ひとつは架蔵の甲斐侍従筆大和物語追考について紹介を兼ねその性格について考えた。大和物語追考は北村季吟の著作になる大和物語抄の補遺をしたものでその門弟の著になると言われているが伝本は少ない。書写者の甲斐侍従とは幕府の側用人であった柳沢吉保の可能性が高い。彼は学問への造詣が深く北村季吟と交流を深めていた。その意味でも架蔵本は注目されよう。本文をみると、架蔵本は書陵部本に近いが、独自異文もみられ今後の大和物語追考研究のひとつの資料になると思われる。もうひとつは新資料の日本大学図書館蔵大和物語鈔についてその紹介と考察をした。大和物語注釈史上の嚆矢とする大和物語鈔の伝本は少ない。日大本は寛永十年の書写になり、この本の注目すべきことは他の伝本にみられない解説、跋文、奥付を有していることである。とりわけ跋文には日大本の成立事情が生々しく記されており注目される。また、内容をみると日大本は新旧両面を有しており、大和物語鈔の生成過程を探る上で貴重な資料と言える。

以上、本論文では徹底した読みと実証とを研究の基盤にし、四分野で各々のテーマについて考察してきた。不備な点は否めないが、新しい視点からの研究は多少なりとも大和物語研究の進展に寄与するのではないかと思っている。今後は不備な点を補正し研究に精進していきたい。